

戦争と田舎の子どもたち

福岡市早良区 北島 こそえ

昭和16年12月8日、戦争が始まった。北風の冷たいお昼時だった。5才から小学3年生までの幼い記憶ではあるが田舎の子ども達でさえこのようであったことを記しておきたい。

その地は、八女郡水田村、現在の筑後市水田である。その影響は、始まってすぐは大してわからず、ただ兵隊に出る方が多くなり、日の丸の旗を持って羽犬塚駅まで行列をして見送ったことを覚えている。

昭和18年4月、水田国民学校入学。校長の下川広吉先生、担任の北川シゲコ先生。ヨミカタ、カキカタ、カズノホン、ヨイコドモ、ウタノホンなどの教科書と、石盤、石筆、おけいこ道具と、ひと通り与えてもらったが、買ってもらったランドセルは、紙で作られたもので入学式の翌日には肩紐が切れてしまった。学校から「モンペを作ってもらいなさい」と言われたのがこの頃である。胸には学校名や、住所氏名、血液型まで記入した名札を付けていた。座布団を二つ折りにして紐をつけただけの防空頭巾も作ってもらった。

授業は普通に行われ、戦争は勝っていることばかり聞かされ、南洋のどこかの島が陥落したと言っては、お祝いのボールをもらった。日の丸の印がついていた。ボールと呼ぶのは敵国語だから、手まりと呼ばされた。外国語は全て日本語に換えられた。音楽の時間のことを思い出すと面白い。「ドレミファソラシド」が「ハニホヘトイロハ」だった。春の小川を「ミソラソミソドド」と「ホトイト ホトハハ イイトホ ハニホ」私は今でも二通り歌うことが出来る。防空演習が始まった。

下校準備をして、地区別に高等科の生徒に手を引かれ自宅へ向う。校長先生がメガホンで「敵機来襲」と呼ばれる。目と耳とを両手で押え道の路肩に伏せる。「ボヤボヤするな！」「おまえ達は死ぬことになるぞ！」とどなられた。何が「テッキライシュウ」なのか言葉の意味さえわからず、ただうろろうろするばかりだった。「なぜ」「どうして」と尋ねることは許されず、命令によって動かされていた。

水田天満宮の境内に、いくつもの防空壕が掘られ、学校の避難場所に決まった。

19年4月、2年生になった。

若い男の先生や用務員さんが兵隊にとられて、担任は代用教員の塩山澄子先生になり、女学校を卒業したばかりの、おさげを2つのダンゴに結び直しただけのお姉さん先生でみんなよくなついた。

都会からは疎開の子が大勢転校して来て、教室は机で一杯になり、都会の様々な言葉は田舎にない空気を伝え、珍しい遊びを教えてもらったりした。

B29が空高く編隊を組んで通過して行くようになり、学校の屋根にサイレンがついた。かつて聞いたことがない大きな音を出し、村中の避難の合図をするようになった。「学校が狙わ

れる」と言われ、水田天満宮の回廊や来迎寺、浄弘寺、下のお宮などで授業があり、サイレンが鳴るごとに家へ帰ったり学校へ行ったりして、何を習っていたのか覚えていない。軍歌ばかりを歌わされていたようである。「カチヌク、ボクラ、ショウコクミン、テンノウヘイカノオントアメニ、シネトオシエタ、チチハハノ、アカイチシオヲウケツイデ、ココロニケツシノシロダスキ、カケテイサンデ トツゲキダ」意味も分からず口移しで覚えた小国民の歌である。

夏休みが過ぎ登校すると、校舎の屋根は赤から黒色へと変り、玄関から右側はトラ、左側はシマ柄にコールタールで迷彩され、学校に兵隊さんが住んでいた。運動場ではカボチャやおイモが大きく育っていた。教科書は2人に1冊ずつになり、物がだんだんと不足して持ち物が盗まれるようになった。弁当もよく中味だけを食べられてしまう。中味もいろいろで、おかゆをビンに入れて来る子、イモだけの子、ムギゴハンは特別に上等でおかずは梅干かタクアンのみで、持って来ることができない子もいて、お昼は外で遊んでいた。「ホシガリマセヌ カツマデハ」と大きく書いた紙が校内のあちこちに貼ってあり、子供なりの戦争協力を強いられ、高学年は飛行場の芝生張り、私達は落穂拾い、イナゴ捕り、ドングリ拾いなどと兵隊さんの食糧集めに精を出した。

20年春、3年生になった。担任は引き続き塩山先生である。B29が毎日高く低く飛んで来て、国立大学に進学していれば兵隊に行かなくて良かった上の兄にも召集令状が来た。数学の教師になって1ヶ月が過ぎたばかりの日であった。入隊の日の軍服姿は、青白い学究肌の兄には、子供の目にも強そうには見えなかった。続いて下の兄も予科練に16才で志願して出征してしまった。祖母と両親は止めることもできず泣いていた。続いて、3人の雇っていた男の人と馬まで兵隊になって出て行き、働き手のない農家になってしまった。その頃、私は、急性の腎炎にかかった。40度を越す高熱に全身がむくみ、耳も聞こえずうめいていた。往診に来た医師は「薬はありません」と病名だけ言って帰られたそうである。父がすぐにお米一斗裏口から届けると、とって返して注射が打たれ、私は助かった。ずっと後まで「お前の命は米一斗たい」と母が言っていた。お金よりも米の世の中であり、物々交換の時代であった。

何もかもが配給の生活になり、農家も米を全部供出し配給を受けることになり、タバコなども配給である。刻んだ葉が配られ自宅で巻かねばならなかったが、その量も少なく「茄子の葉や蓮の葉もヨカバイ」と混ぜていた。タバコ巻きは私の仕事で、1日分20本を父が喜んでくれることが嬉しくて、毎日頑張っていた。用紙はコンサイスの辞書をやぶって使用していた。通学用の運動ぐつも配給で一度に1級に5足位しか無く、クジで決めていたので、当たらない子は、夏も冬もはだしである。小さい子には、暑さも冷たさも同じように足が痛んだが、だれも不平を言うこともなく、がまんをするものと思って学校へ通っていた。

身の回りの金属が次第に姿を消して行き、天満宮の●、お寺の鏡、家の中ではなべかま類や、仏壇の飾りも蚊帳のツリ輪やアルミの弁当箱まで役場の前に集められ、その品々の代用として木、竹、紙などで考案され、制服の金ボタンまで陶器になった。物不足を書けばきりがなく、女の子のパンツのゴムが上下とも布紐が通してあり、急ぎの時や、かじかんだ幼い手では解き

にくく、大変困っていた。タビのこはぜもなく紐が変わった。服は当てつぎだらけで、母の繕い方が見事だと他の級の先生にまで誉められたことがある。

エンピツも消しゴムもクレヨンも、まともに使えるものはなくなってしまった。

福岡、大牟田、佐賀、久留米とまわりの都会が爆撃を受け、「今度はここバイ」と大人達が心配するようになり、広島や長崎では、原爆が投下された。

8月15日「重大ニュース」で天皇陛下のむづかしい言葉が流れた。「戦争に負けたゾ」父がポツリと言った。戦いは終わっても、私の家族全員揃うのにそれから8年もかかった。上の兄から「中国に残されている」と知らせが来たのが4年目で、それから4年して昭和28年に重度の結核にかかって帰国した。祖母は喜こんでその日に亡くなってしまった。その兄はそれから6年は生きていたが、しみじみと「戦争は絶対にしてはならない」と言って死んでしまった。

私はこの戦争で大切な兄を亡くしてしまったし、幼いながらも戦争協力をさせられ、がまんを強いられ、命令にただうろうろしてその存在は無視された。子ども達はみんな、子どもらしく生きることができていないことすら理解することもなく、ただ、流されているだけであった。子どもだからといって何の容赦もしてはもらえなかった。



兄(龍巳)から戦後初の便りが来た時